

【11】 摩利支天神鞭法

写1冊

〔書名よみ〕 まりしてんじんべんほう 〔著編者〕 未詳

〔写刊年次〕 天保七年（一八三六）

〔外題〕 摩利支天神鞭法

〔内題〕 摩利支天神鞭法

〔その他〕 ナシ

〔残欠状況〕 全 〔保存状況〕 小破 〔装訂〕 袋綴・紙縫 〔丁数〕

七丁 〔本文用字〕 漢字・片仮名・梵字 〔二面行数〕 八行 〔界線〕

ナシ 〔表紙〕 本文共 〔法量〕 縦一二・〇×横一七・七糎 〔料紙〕

楮紙（美濃紙） 〔書入〕 返点・送仮名（墨） 〔表紙書入〕 津軽深浦

／春光山円覚寺／尊岸 〔印記〕 ナシ 〔備考〕 尊岸一二三。内題下

に「鬼宿日始行」とあり。

〔奥書〕

文化十^西年（一八一三）八月^{授与}寛明

大阿闍梨亮寛大和尚^示

天保七^甲年（一八三六）六月十九日^{授与}尊岸

松前御祈願所

阿吽寺法印寛山^示

〔解題〕

摩利支天は、日月の光線の意で、古来、「陽炎」「威光」などと訳し、陽炎が神格化したものである。インドでは、隠形術によって障難を除く

ものとされたが、日本では、主に武人の守護神として信仰された。

「摩利支天神鞭法」とは、修験道において、摩利支天を本尊とし怨敵災難等の消滅退散を祈る秘法で、『修験常用秘法集』にも所収される。

本書「摩利支天神鞭法」は、尊岸が、松前の阿吽寺寛山から授与されたものである。尊岸が法を受けた師は津軽一円に複数いるが、松前にも至っている点が注目される。

阿吽寺は、現在は松前町松城に所在する。文化年間（一八〇四）一八）頃の松前分間絵図では、福山城の北東にあたる。高野山真言宗、海渡山と号し、本尊は不動明王である。「新羅之記録」によれば、創建は嘉吉三年（一四四三）安東盛季の渡道に随従した永善坊道明が営んだ庵に始まるという。あるいは津軽に居住していた蝦夷管領の安東盛季が、南部との戦いに敗れた際に、菩提寺の寺号を携えて松前に再興したと伝える。従来津軽にあって安東氏に仕えてきた真言宗阿吽寺（現青森県市浦村）の道明は渡道の際、如意輪観音を捧持して祈祷に肝胆を砕いた。渡道には真言修験者の万願寺・山王坊・実相坊らも従っていたと伝える。伝阿吽寺の僧山王坊弘智作『十三往来』には、阿吽寺が「十三千坊」の一つとして繁栄していることが記される。

大永七年（一五二七）に三世蠣崎義広の弟高広（永快と号する）が再興し、松前藩領の時代には唯一の祈禱寺として藩内の宗教施策に深く関わった。藩主の菩提寺である法幢寺や藩主一族の系列にある専念寺に次ぐ特権寺院で、藩からの財施も手厚かった。元和五年（一六一九）大館から現在地に移転した。奥殿には空海作と伝える不動明王立像（道指定文化財）のほか、藩主松前慶広が奉納した紺紙金泥法華経や、祈祷に威力を発揮した勝軍（將軍）地蔵などが安置され、今なお祈禱寺としての雰囲気伝える。明治元年の函館戦争の折に、堂舎は焼失し、近世の建物として残るのは、土蔵造の奥殿だけである。現在の山門は旧福山城の堀上門を移築したものである。

（渡辺 麻里子）

次念誦百反

ヲシニリシエイソワカ

次彈指三反

死所不至(印)
加(頭)指彈

三摩利支曳 怨靈 昂滅

怨敵 三度彈指

次法螺印 奉送貝三匝

三昧法螺聲 一乘妙法說

經耳滅煩惱 當入阿字門

初及声ハ出メ唱、ニ反ノ声

ヒキク唱(三反メハ)ロノ内ニテ

前後ノ句ハカリ唱ルナリ

三昧法螺聲 當入阿字門

次鯨波音 左右手金剛拳ニテ

觀念計也

次以鞭止 三度唱

名 怨敵消滅 三度

次早念誦 千反

三式(?)

次心經等法樂

以上

○此法初行百日以後

左(通)可(行)

先護身法

次根本天扇印

金剛輪印

次隱形印 宝瓶印

次念誦百反

ヲシニリシエイソワカ

每日念ノ可(持)此(鞭)

一切災難消滅

文化十酉年八月 授子 寬明

大阿闍利宗亮寬大和尚

天保七申年六月十九日 授子 尊岸

松前御願所

阿吽寺法印寬山